明石な審神者と刀剣男士

よしの桜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある本丸に新しく審神者が着任した。

後に明石な審神者と皆に言われる、睡眠大好き審神者と刀剣男士達の本丸攻防物語です。

目次

明石な審神者と初期刀 ―― 1
明石な審神者と綺麗な刀 ―― 6
明石な審神者と演練大好き刀 ―― 10
明石な審神者と鍛刀祭 ―― 16

明石な審神者と初期刀

新しい審神者を迎えた本丸が稼働を始めた瞬間、庭の枝垂れ桜が満開に花を咲かせた。
ちらり、ちらりと花弁が風に吹かれて廊下に落ちるのを見ながら、こんのすけは主を執務部屋へと案内した。
シンプルな机とパソコン、プリンターに空っぽの棚。
手前にある休憩用のテーブルに審神者が持っていた初期刀を置いた。
「・・・具現なら鍛刀部屋が一番でございますが」
「いや、俺はここの方がいいね！」
審神者・睡蓮は満面の笑みをもってこんのすけの意見をぶった切った。
こんのすけも見習いを経て審神者に就任しているので、並みの初心者審神者より知恵がある・・・からやりにくい。
「わかっている。これからこんのすけが可愛い初期刀をどんな目に合わせるか・・・俺にはわかっているんだからねぇぇ」
「マニュアルなのです！　ワタクシもやりたくて初期刀様を血みどろにしているわけではありませぬ！」
やはり知っていたか、初期刀初めてのお使いからの血みどろ手入れコース。
こんのすけは毛を逆立てて無罪を主張すると、睡蓮は穏やかでさわやかな顔に一転した。
「では、俺は見習い先で血まみれスプラッタな刀の皆様の手入れをする先輩の横で見学してたから手入れデビューはいらないですね！」
「いえ、これはマニュアルで」
「いらないよね」
「いえ・・・」
「いらないよね。資源の無駄だし」
「・・・ハイ」
〈ここでイエス以外の答えを言ったら初期刀にチクるぞ〉と、でかでか

と顔に書いた睡蓮にこんのすけは負けて黄昏た。
それを横目に睡蓮は持ってきた初期刀を床に置いてそっと鞘をなでると目をつむって霊力を注ぐ。
一瞬後、強烈な光と桜吹雪が押し寄せ、人影が表れた。
睡蓮を上から見る、ちょっと薄汚れた布に隠れた青い瞳と端正な顔。
「山姥切国広だ。・・・何だその目は。写しだというのが気になると？」
へらりと笑った睡蓮は左手を差し出す。その手をじいっと見る山姥切。
「初めまして、俺は睡蓮。一緒に歴史を守りましょう」
見つめて動かなかった山姥切が、刀を持たない左手を差し出すと睡蓮がすかさずぐっと握る。
「では！　次は」
「次はお昼寝。これ常識」
「わ?!」
山姥切の具現を確認したこんのすけが張り切って段取りを口にする前に睡蓮は山姥切を思いっきり引いた。
刀剣男士とはいえ、具現したての山姥切はあえなく体制を崩して睡蓮に倒れ掛かるが、睡蓮は要領よく山姥切を畳に押し倒し、自分もごろりと横になる。
睡蓮は完全に寝る体制になっていた。
「ちょ！　睡蓮様！　まだ日が高いですよ！　次！　次移らないと！」
「日が高いから昼寝の時間じゃないですか・・・ぐぅ」
「ちょ、本当に寝ちゃったんですかぁぁ!!」
ゆさゆさとこんのすけが睡蓮をゆするが、睡蓮はむにゃむにゃと言うばかりで眠りの国へと旅立って戻ってくれない。
その横で畳に倒れた山姥切が「俺というやつは、例え具現一日目とはいえ人間に押し倒されるなんて・・・俺が写しだからか、そうなのか？」と黄昏てしまったのをこんのすけは気づかなかった。

＊＊＊

睡蓮の本丸が稼働して3日目。

睡蓮は「はぁぁ、朝ごはんご馳走様～。ではちょっと寝るわ」と言って夢の国に旅立った横でこの本丸にいる者達が額を寄せて机を覗き込んでいた。

「おい、これは本当にこれだけなのか？」

初期刀山姥切が眉間にしわを寄せてこんのすけに問いただす。

「大将はこれ、なんて言ってたんだ？」

初鍛刀愛染国俊もたらりと冷や汗をかきながらこんのすけをうかがう。

「この本丸の残高はこれっきりです」

0　ゼロ　1銭もありません。

瞬間、山姥切が寝ている睡蓮の上半身を起こして小刻みにゆすった。

「ああ、なんかジェットコースターぁ」

「起きろ、起きろ、起きろ！　これはどういうことだ！」

ブチ切れた山姥切のシェイク5分でやっと目を覚ました睡蓮が突き付けられた銀行口座の数字、0を目にした途端、へらりと笑った。

「大丈夫、大丈夫」

「どこが大丈夫なんだ、言ってみろ！」

「こんなこともあろうかと、じゃじゃ～ん」

睡蓮はパソコンのある机の一番下の引き出しを開いて中のものを見せる。

「ほら、カップラーメンがこんなにたくさん！　まだ寝ていられるよ～！」

「どこが大丈夫なのですかぁ！　睡蓮様！」

「飢え死にまでは、まだ猶予がある」

「それしか大丈夫部分がないじゃないですか！」

「泣いて喜べ！　こんのすけにはちょっと高かったけど赤いきつねやるよ！」

「うれしくありません!!」
　こんのすけと睡蓮のコントを遠い目で見ていた愛染だったが、横にいた山姥切はパワーアップ大魔神バージョンになり睡蓮の頭をわしづかみした。
　後にこんのすけは、山姥切が歌仙にジョブチェンジしたのかと思ったと語る。
「痛い痛い痛い！　まんばちゃん痛い！」
「呼び名はともかく、ふざけるな！　俺にとってはそのカップラーメンの量、おやつで軽く吹っ飛ぶわ！」
「えええ！　ちょっと大食いすぎない？」
「刀剣男士なめるな！」
　ぎりぎりと力を籠める山姥切と、痛いと騒ぐ睡蓮がふと美味しい匂いに気づいて愛染の方を振り向いた。

　そこには、机にしまわれていたはずのカップラーメンが、湯を入れられて机に所せましと並べられていた。

「うん、俺はこっちのかれーぬぅどる？　っていうのが一番かな」
「ワタクシはやはり、赤いきつねですなぁ、あ、睡蓮様、お先にいただいております」
「ノォォォ！　お前ら、何やってるのぉぉ！」
　机の引き出しは空っぽになっているのを見てから睡蓮は絶叫した。
　山姥切はそれを聞きながら怒った顔で並べられたカップラーメンを手にして1分で完食した。
「ちょっとまんば！　お前、それは非常食なんだよ！　味わって食え！」
「は、俺たち刀剣男士にとっては水にすぎん。次」
「へい！　次は味噌らぁめん一丁！」
「あああ！　それは俺の好物の味噌ラーメン！」
　絶叫する睡蓮に、愛染と山姥切とこんのすけはにやりと笑った。
「「知ってた」」

絶句する睡蓮の前で、３人とも勢いよく味噌ラーメンをすすりだす。
「お、お前ら俺の分・・・あぁぁぁ！　ない！」
「「ご馳走様でした」」
「さぁ睡蓮様！　本当に無一文になりましたから、急ぎお仕事をしないとお昼に間に合いませんよ！」
キリっと仕事の斡旋をしだすこんのすけだが、その腹はぽってりでかい。
刀剣男士２人は、さすがに腹は出ないが気力体力十分、といった顔で出陣先を吟味しだした。
「やっぱ肉食いたいから山がいいな」
「そうだな。山ならイノシシと川の魚を数匹仕留めれば良いだろう」
「畑の野菜もちゃんと食べないとだめですよ」
「ああ、わかっている。肉野菜肉肉肉だったな」
「肉肉米肉肉じゃなかったか？」
「すっとぼけないでください！　肉油揚げ肉油揚げ油揚げに決まってますでしょう！」
出陣ついでに食材調達をもくろむ刀剣男士達を背中に、睡蓮はパソコンを起動した。
出陣１つとっても事務作業が入るのがめんどくさい。
しかし、しなければ少なくとも今日の昼食は井戸水一杯になる可能性が高い。
睡蓮はため息をこぼしてから、出陣の事務手続きを始めた。

明石な審神者と綺麗な刀

審神者・睡蓮は稼働一年も満たない初心者マークを頭につけていると政府では認識している。

1か月終わり成績表のような物を送られた。睡蓮はそれを一目見てから「ふぅん」と言って机に広げて寝ころんだ。

それにぶち切れしたのは真面目な初期刀山姥切だ。

頭をわしづかみして力を籠めだした山姥切に、さすがの睡蓮も悲鳴を上げた。

「痛い痛い痛い！　ちょっと頭から脳みそがもれちゃうよ！」

「大丈夫だ。もれても生きていける」

「それはお前らだけだからね！　俺は霊力あるけど普通の人間だから！」

審神者と初期刀のじゃれあいを横目に愛染とこんのすけがため息を吐きながら成績表を見る。

「これって最低レベルだけど1か月目だからこれで許してやるよ。次はもっと成果だせよおら、って言ってない？」

「まさにその通りです。というか、1か月たっても短刀一つ拾えない縁ってすごいですよ」

睡蓮は愛染を鍛刀したからには、そちらの能力はあることが立証されている。

しかし、どこに出陣しても資材は拾えても刀を手に入れることができない。

「これがアレか。ナンミンってやつか」

「はい、ドロップ難民決定ですね」

山姥切は頭をわしづかみしながらゆさぶりもかけ始める。

「さぁ、鍛刀しろ！　さすがに俺と愛染2人だけはきつい。アンタにドロップ運がないのはわかっただろう」

「えええ、めんどくさい」

「めんどくさかろうが、眠たかろうが、やれ!!　やらないならずっとゆさぶるぞ!!」

睡蓮もさすがにゆさぶり攻撃が効いたので、しばらくぶりに鍛刀部屋へと足を向けた。
初期からいじっていないので、鍛刀部屋も2つしかないが意外ときれいになっている。
「めんどくさい・・・から親方、良いようにやっちゃって。あ、打刀か脇差か短刀ね」
へいおまち、とばかりに妖精達が資材を炉に入れると1時間半と20分。
「打刀と短刀か」
「お願い、歌仙だけは勘弁してね！　他ならだれでもいいから神様！
あ、でもちょっと蜂須賀は後が良いかも！」
炉にひたすらお祈りする睡蓮に、山姥切が目を細める。
「きっと名刀コンプレックス山姥切様を思いやって・・・ではなく、単純にお小言うるさい系歌仙様が苦手なんですね」
「まぁ、歌仙と蜂須賀以外なら山姥切、いいんじゃないかな」
「悪かったな」
正鵠をど真ん中に射られた山姥切が少々前かがみになった所で、えいやっと睡蓮は札を炉に入れた。
妖精が炉から取り出したのはやはり打刀と短刀。
睡蓮は霊力を籠めて具現すると、桜吹雪が舞い人影が現れる。
「蜂須賀虎徹だ。俺を贋作と一緒にしないで欲しいな」
「乱藤四郎だよ。……ねぇ、ボクと乱れたいの？」
固まった睡蓮に後ろで見ていた山姥切達は苦笑いをする。
「主、アンタ微妙に引き運悪いだろ」
「ちょっと微妙だな。大将」
「二番目を引き当てちゃいましたか・・・」
憐みの目で見られた睡蓮が鍛刀部屋の端っこで黄昏てしまった。

＊＊＊

事務作業が終わり、休憩がてら寝ようとした睡蓮の近くで乱が寝こ

ろんで雑誌を見ていた。
「ねぇ主さん。主さんって結構着るもの無頓着だよね」
頬づえをついて言う乱に、睡蓮は心外なという顔で反論した。
「いや、これでも色々悩みに悩んでこの服なんだ」
「単純に汚れが目立たない黒選んでるだけでしょ、主さんは」
急所を突かれて睡蓮は自分の体を見る。
上下黒の室内用ジャージに黒い靴下。
「山姥切と一緒だよね。黒なら目立たないって思ったんだろうけど余計に目立つって所がわかってない」
「うぇ」
指ささされた場所にご飯粒がついていて、さすがの睡蓮も赤面した。
「次鍛刀したら、主さんの運なら歌仙兼定絶対来るよね」
「ううう」
「山姥切と違って、彼なら血管浮き立たせながら主さんの着る物にお小言コースだよね」
「ううう」
指摘された通り、見習い先で歌仙と着る物他で言い争いをしていたのを思い出した睡蓮にとっては悪夢の具現に等しかった。
頭を抱える睡蓮に、それまでのしかめっ面をきれいになくした乱が雑誌のページを一つ指さした。
「主さん服選ぶのってめんどくさいんでしょ？　それだったら雑誌のをそのまま着ちゃえばいいんだよ。これなら歌仙も現代の流行りだって言えば納得するじゃん」
「だがしかし、高い・・・」
乱は通販の雑誌を見ていたらしく、そのページのモデルが着ている室内着は確かに少々おしゃれだった。
しかし、値段が高い。睡蓮的には0が一つ多い。
「歌仙にお小言されるよりお金で解決しちゃった方が楽じゃん」
「そっか。そうだな・・・」
気落ちしたまま乱に勧められて、こんのすけから受け取ったモバイルの購入ボタンをタッチする。

買い上げ終了のページの下を見ると、先程の洋服以上の金額が示されて睡蓮はのけぞった。

「な、なんなのこの金額?!」

「もちろん、ボクとみんなの私服込み。みんなの分も一緒に買わなきゃ本丸の雰囲気わるくなるでしょ?」

「この金額を払う為にも、働かないとだめですよ睡蓮様」

やったぁ、と小躍りしている乱とにやりと笑ったこんのすけに、睡蓮はがっくり頭を垂れた。

ちなみに、一番高い洋服代だったのは蜂須賀の分、それも自分の服より高い室内着だった事に睡蓮は後に気づいてシャーペンのシンをへし折った。

明石な審神者と演練大好き刀

審神者の睡蓮は基本本丸を出ることはないがゴロゴロする、もとい休むにはそれなりの事務仕事をこなさないといけない。
今日は初期刀山姥切が短刀達と出ていたので代わりに蜂須賀虎徹が審神者の補佐をしていた。
蜂須賀はこんのすけの助言を聞きながら、慣れないパソコンと向き合い書類のチェックを素直にこなしていた。
頃合いを見て、蜂須賀は睡蓮に休憩を申し出た。
「1時間集中して書類作業をしたからね、そろそろ休憩をした方が良いと思うよ」
「・・・いまだかつて、俺は休憩しようと労わってもらった事がなかったよ、蜂須賀」
「それは睡蓮様が他の皆様が休憩を言い出す前に勝手に休んでいるからですよぅ」
お茶が出されている机に移動して、ほっこり休んでいると蜂須賀は申し訳ない顔で茶菓子をだす。
「この本丸は料理上手な刀がまだいないから、既製品のお菓子で申し訳ないけど用意したよ」
「いや、十分だよ」
「早く歌仙が来ると良いなぁ。彼の料理とお菓子は絶品らしいね」
「いやいやいや！　君達の料理とお菓子は十分美味しいよ!!」
歌仙と折り合いの悪い（見習い時代に経験済）睡蓮は思いっきり顔を横に振って、昨日の夕食の蜂須賀の手料理の美味しさを語ると、蜂須賀は少々頬を赤らめて笑った。
「俺も刀だからやはり敵を倒したい。けれどまだまだレベルが低くて刀装を良く破壊してしまってすまないね」
「いや、刀装は消耗品だから気にしなくていいから」
「そうか・・・いや、刀装も経費がかかるし気になるよ。だからまだ人数は足りないけど演練に出たいのだが」
じぃっと見つめてお願いを言ってくる蜂須賀に睡蓮はちょっと下

を向く。
はっきり言って演練に行くのがめんどくさい。
山姥切にだったら素直に言えるが、蜂須賀には言うのがちょっと恥ずかしい。
蜂須賀にため息をつかれちゃうかな、とチラリと視線を上げると蜂須賀は右手に小さなカギを持って睡蓮に見せる。
「これは何のカギだと思う？」
「ん？　あ、それは?!」
数秒考え、慌てて立ち上がり棚のとある場所に手をやる。セロハンテープで張ったカギがない。
「巧妙に隠れているけど、その棚の下、小さな冷凍庫だね？」
にこにこ笑う蜂須賀に、冷や汗が出る。
「そして、そこにあるのはハー○ンダッツ。ちょっとお高いアイスクリームだったかな」
「・・・・・！」
「主はお風呂上りにそのアイスを食べるのが殊更好きみたいだね」
「・・・・・！」
ばれてる、と心中つぶやく睡蓮に蜂須賀がとどめを刺した。
「山姥切も主と同じく抹茶味が大好きだって前に言っていたよ？」
「や、山姥切が戻ったら演練、行ってみようか、蜂須賀」
睡蓮が負けを悟って演練に誘うと、蜂須賀は花の様な笑顔を見せた。

＊＊＊

「ほら、主は歩くのが好きじゃないんだろう？　これに座ると良いよ」
「いや、好意だけもらっておくよ。ありがとう、蜂須賀」
隊長を山姥切に、蜂須賀他2名を連れて演練会場に入った所、蜂須賀がすばやく入口にあった車椅子を引いて持ってきたので睡蓮は全力で断る。
「主、遠慮はしなくてよいぞ。俺達が超特急で試合場まで運んでやる」
「山姥切も、好意だけもらっておくよ」

試合場はちょっと離れているのでぞろぞろと歩いていたが、睡蓮はいやな予感に襲われた。
自動販売機にフードコーナー、喫茶店にレストラン。なぜかそれらを横切る形になっているので睡蓮は短刀ではなく、己の初期刀の襤褸布をしっかり握った。
案の定、良い香りがするたびに山姥切がふらりとそちらに行きそうになるので引っ張る。
「主、あの美味しそうな丸い団子が俺を呼んでいるんだ、行かせてくれ」
「あ～、あれはお前だけじゃなく財布が重い全ての刀を呼んでいるんであってお前は呼んでないぞ」
「氷が細かく刻まれているぞ、あれなら試合前に食べても大丈夫だ」
「ダメです。あれは食べたら舌に色がつく食べ物なんだ。相手に笑われちゃうよ」
遅々として進まない審神者と初期刀コンビに、蜂須賀が苦笑して振り返る。
「では、今日一番手柄を立てた刀が帰りに食べたい物を指名する権利をもらうっていうのはどうだい？」
「そうだよ主さん！　ボクだって選びたいな！」
「こんのすけにはお土産買っていけば納得してくれるぜ！」
乱と愛染も加わってきたので、睡蓮はあいまいにうなずいた。
「まぁ５人プラスこんのすけなだけだから、お財布的にはＯＫだけど」
「良かったな、山姥切」
「ああ、今日の誉は誰にも譲らない」

当然ながら、初心者レベルの山姥切チームは負けに負けたが、倒した人数が多かったのは意外な事に蜂須賀だった。
落ち込む山姥切だったが蜂須賀も打刀、それも名刀なので「じゃぁこの店で」と指さした店はうなぎ店だった。
「特上うなぎ定食」
「特上大盛うなぎ定食」

「レディースうなぎ定食お願いね！」
「俺は主と一緒にするからウナギ定食２つ。あと土産用のうな重１つ」
茶で、と注文しようとした睡蓮を察し、最後に愛染がさっさと注文してパタンとメニュー表を閉じる。
店員は乱の注文に動じることなく復唱して去って行った。恐らく他の本丸の乱もレディースを堂々と注文するのだろう。
「アンタ、詰めが甘いな。俺なら牛丼屋だとでも思ったんだろうが、俺以外だったらここと大差ない出費だと思うぞ」
「う～ん、ボクだったらイタリアンだったなぁ」
「俺だったら寿司だな！」
「寿司とイタリアンか、どっちも良いね。でも、うなぎって一度食べてみたかったんだ」
目を輝かせる蜂須賀に、短刀２人も「まぁ、僕も興味あったんだよね」と仲良くうなずく。
演練が終わって夕食を外で食べて本丸に帰ると既に７時。
目を輝かせて土産のうな重を食べるこんのすけを見ていた睡蓮に、腕まくりをしながら山姥切が尋ねてきた。
「夕飯は何が食べたい？　うな重の礼だ、簡単な物ならアンタの要望を聞くぞ」
「・・・え、山姥切、これから夕食？」
呆然とする睡蓮に、室内着に着替えて顔を出した蜂須賀が当然の顔をしてうなずいた。
「うな重は別腹だよ、主」
「そうだね。別腹だったかな」
「うん、別腹だな！」
遠い目になりながらも、「あ、俺はおなかいっぱいだから君達だけで食べるといいよ」と言うと「じゃぁその気になったら食べれるようにお鍋にしよっか」と乱が言い出したので、４人はすごい勢いで野菜を適度な大きさに切りだした。
「睡蓮様・・・刀剣男士様達と生活をすればどこで驚くか、審神者ある

あるです」
「あ、やっぱり？」
　ペロリと平らげたこんのすけがそっと話しかけてきたので声を落として同調すると、こんのすけが深刻にうなずいた。
「特に審神者様は書類作業等の体を動かさない管理職。つい刀剣男士様達の食欲につられて大食いになる傾向があり近年、審神者の成人病患者は急増しております」
「ひぇぇぇ」
「特に」
　ギラリ、とこんのすけの目が底光りしたように見えたのは睡蓮の気のせいだろうか。
　妙な迫力を感じて身じろぎした睡蓮の手をこんのすけがふんずけた。
「睡蓮様の様な、食っちゃ寝至上主義の審神者様は早くに健康を害する事が統計的にわかっています」
「いや、食っちゃ寝至上主義って程でも」
　睡蓮の抗議を聞いていないのか、こんのすけはトーンを落とさずに爆弾発言を落とした。
「ですから、高カロリー食の摂取を一人で楽しむ審神者をこんのすけは許しません」
　その言葉に、睡蓮は思い当たって目を見開いた。
「ま、まさか、こんのすけ・・・お前が見つけたのか冷凍庫！」
　犯人を見つけた心境の睡蓮に、こんのすけはニヤリと笑った。
「そして、こんのすけは健康管理につきましては、初期刀様と手を組むことは良くあります」
「え?!」
　いやな予感に襲われて、こんのすけの手を振りほどき食堂に行くと、鍋を食べ始める刀達のお膳に1つずつアイスが置かれていた。昨日通販で取り寄せておいたはずの！
「あ、主さんも食べに来たの？」
「お先にいただいているよ」

無垢な笑顔で迎える乱と蜂須賀。
「やっと来たのか。遅かったな」
「やっぱアイスはちょっと溶けた所が美味しいよな！」
確信犯な笑みを浮かべる山姥切と愛染。
もちろん、自分の膳には1つだけアイスが乗っている。ただし、あまり好きではないイチゴ味だが。
「ごめんね、主。俺は執務室にある冷凍庫は君だけのアイス入れだと思っていたよ」
アイスを手にへこんでいる睡蓮に、蜂須賀が箸をおいて軽く頭を下げた。
「あれはアイス用の冷凍庫だったんだね」
「ああそうだ。アイス用に調整された温度だからな。これからはあそこに置くといい」
「アイスって美味しいよね。ボク、具現してもらえて良かった！」
「ああ、敵をいっぱい倒して給料をもらってアイスを買うのが楽しみになってきたよ」
「あ、それならこれからは自分が買ったアイスには名前を書かないとな」
和気あいあいにお鍋とアイスを食べる刀達を見ながら、睡蓮はアイスを開けて一口食べる。
柔らかいアイスが口の中で溶けていく。
「アイスの為に事務作業が多くなるのか・・・」
「アイスの味を教えたのは睡蓮様ですからね」
めんどうくさい、と言いかけたがこんのすけの言い分ももっともなので睡蓮は文句をアイスと共に飲み込んで溜息を吐いた。

明石な審神者と鍛刀祭

政府は事前連絡というものが好きではないらしい。
「睡蓮様ー！　睡蓮様ー！　起きてください！　ビッグニュースですよ!!」
ゆさゆさと小刻みにゆすられて半身を起こした先に見えたのは太陽ではなく暗闇だった。
「寝よう」
「ビッグニュースなんですよ！　起きてください！」
寝直そうとしたら太ももに添えられたこんのすけの足が再度小刻みにゆれたので、眠い目でこんのすけを見下ろすと、こんのすけの頭に封筒が乗せられていた。
「器用な・・・手紙か」
「はい！　政府からの速達です！」
眠い目をこすりつつ封筒から手紙を出している間に、騒ぎに気付いたらしい乱と愛染が部屋に入ってきて明かりをつける。
まぶし気にしながらも手紙を上から下まで見てから、目を輝かせている愛染に手紙が渡された。
「何って書いてあるの？」
「鍛刀祭だって。え～っと」
あいさつ文と激励部分を飛ばして中位にある所に目を止める。
「初心者審神者様は普段より成功確率が上がる鍛刀祭を開催します。期間はこの手紙を見た瞬間から１２時までの６時間。　今からか！」
「急だよね。でもどの刀でも出やすいって事？」
乱の瞳は超新星の如く輝き、愛染の瞳は半眼になってあくびをしていた睡蓮ヘにじり寄った。
「今だよ主さん！　今ならきっと噂の三日月宗近を降ろせるかもよ！」
「蛍・・・いや、もうちょっと目標を下げて山姥切の兄弟刀の堀川国広が来てくれるかもしれないな！　大将頑張ろうぜ！」

盛り上がる2柱の横で睡蓮は顎に手をやる。
「いや、ここはひとつじっくり作戦を考えて・・・考えて・・・」
「・・・」
「・・・」
「寝ておりますね、睡蓮様」
目を閉じて考える仕草をした睡蓮に、3秒待った2人は睡蓮を担ぎ上げて鍛刀場所へと移動した。
「いや、事前に出やすい黄金比率と遠征計画を考えてだな」
「各資材２００個は確保して後は鍛刀資材だな」
「玉鋼が足りないね。江戸の加役方人足寄場に山姥切と蜂須賀必須で何回か遠征だね」
「手伝い札がまったくありません。睡蓮様に隙間時間なく鍛刀してもらいましょう!!」
燃え上がる乱と愛染、こんのすけ主導の鍛刀祭りのゴングが鳴った瞬間だった。

＊＊＊

「というわけでございまして、只今睡蓮様は霊力不足でお部屋におります」
「そうか。俺は遠征だから、主をよく見ておいてくれ」
朝食の席で鍛刀祭りと遠征のお願いをこんのすけからされた蜂須賀が初めに言った言葉は主の朝食の不在理由だった。
蜂須賀の言葉に深くうなずくこんのすけ。
横で山姥切が特に言葉を発しないのは、口に物が入っているのもあるが朝に会ったからだ。
鍛刀部屋に置いてあったのは愛染国俊４柱。
愛染は「脇差狙いだったんだ」と苦笑していたが、縁か愛の結果にコレジャナイ感と恥ずかしさに睡蓮は隣で空いていた手入れ部屋に行ってしまった。
「今も４０分で完成と出ておりますが」
「普通なら脇差なんだけど」

「これで俺が出てきたからな～」
遠い目になる乱と刀の愛染を籠に入れる愛染を思い出しつつ、山姥切は朝食を平らげておにぎり６つ（１０時のおやつ）をしっかり持って出陣準備に席を立った。
乱は庫裏を出て歩いていると、前方からこんのすけがぴょんと現れた。
「こんのすけ、蜂須賀と山姥切どうだった？」
「快く遠征を引き受けていただけました！　山姥切様はおやつのおむすびをしっかり持って行きましたが」
「山姥切らしいよね」
くすくす笑いながら乱が手入れ部屋のふすまを開ける。
「主さん、朝食・・・っていないよ！」
「睡蓮様?!　どこに」
愛染は遠征メンバーになったので、乱は睡蓮の朝食をこんのすけは鍛刀祭りの情報収集に行っていたスキに手入れ部屋でふて寝していた睡蓮が消えていた。
気配を探す間もなく、隣の鍛刀部屋から広がる霊力。
「侍従なしに鍛刀ですか、睡蓮様」
慌ててこんのすけが鍛刀部屋に走り込み、乱は食事を机に置いてから続く。
そこには背中を丸めた睡蓮がいた。
鍛刀時間は４０分。
「ど、どうなさったのですか？　相変わらずの鍛刀時間なだけでございますよ？」
落ち込んでいるらしい睡蓮の背中から覗き込むと睡蓮は頭を下げたままボソリとつぶやいた。
「全部いっぱいつぎ込んだんだ」
「はい？」
「玉鋼も砥石も９９９個」
「はい?!」
慌てて資材を見ると確かに在庫があまりない。

「なのに４０分・・・。俺には1時間半の呪いさえもないのか」
「主さん・・・」
「き、きっと今度は脇差の誰かがいらっしゃいますよ！」
乱はどう言えば睡蓮の気が晴れるかわからずに口を閉ざし、こんのすけは持ち前のポジティブ発言をかけるしかなかった。
山姥切が遠征数回から帰ってきて最後の鍛刀の侍従になった時には愛染用のカゴにいっぱいある愛染国俊とその前に鎮座している愛染一柱(資材全て９９９個使用と書かれた札がある)が置いてあった。
こんのすけの帳簿を見なくてもわかる。今までの全てが愛染国俊に変わったという事を。
山姥切は主の肩にそっと手を置いた。
「主、これで最後なのだから思いっきり何も考えずに霊力を籠めるというのはどうだろうか」
「山姥切・・・」
朝見た時より体が細くなったように見える睡蓮に、山姥切は襤褸布で顔を隠しながらとつとつと語る。
「堀川の兄弟や、乱の兄弟、愛染の兄弟をと無理に思わず、一緒に戦ってくれる男士を願うのはどうだろうか」
「そうか、そうだな。やってみるか！　誰かお願い！　歌仙でもこの際良いから！　誰かヘルプミー!!」
願いを込めて窯に玉鋼を投げ込む睡蓮の後ろで、息をつめて見ていた3柱がついつぶやいてしまった。
「でも歌仙はイヤなんだね・・・言葉と裏腹に背中が語ってるよね」
「大将、選り好み鍛刀してたのか。そりゃ女神さまのお仕置きだったんじゃねぇ？」
「歌仙はいいやつだよ。もし来たら良好な仲になるよう取り持つようにしよう」
願いを込めた鍛刀に、遠征で唯一持ってきた手伝い札をこんのすけがそおっと妖精達に渡す。
窯から取り出された刀は、愛染より大きかった。
「おお！　これは！」

「やっと、やっと来てくれてありがとおぉ!!」
喜ぶこんのすけの横に来た睡蓮はそのまま喜びに手を打ち付けると、誉桜が舞った。
光と桜吹雪が去った後、佇む人影は一礼をする。
「僕はにっかり青江。うんうん、君も変な名前だと思うだろう?」
喜ぶ睡蓮の後ろでは今日の帳簿をつけながら鍛刀運の悪さに頭を抱えるこんのすけと山姥切、自転車操業でもなんとか結果が出て疲れがにじんでいるが笑顔の乱と愛染と蜂須賀。
青江は周りを少し見渡し
「主の為に、敵は石灯篭のように切って見せよう」
にっかり笑って主である睡蓮の手をとった。